

「中国の旅」で承德へ行くことができた。早速、母の埋葬地を訪れようと、当時住んでいた「南営子ナンエイシ五条胡同ゴジョウワコト」に行ってみたが、その辺り一帯は高い塀に囲まれた工場になっていて、当時の人々はだれもそこには住んでいなかった。戦後三十四年もたったことであり、結局、その所在は分からなかった。致し方なく、以前住んでいた家の付近と思われる場所から「承德の石」を持ち帰って、仏壇に供えた。

昭和五十八年八月十一日、ささやかな我が家の墓を建立した。善光寺から分骨してもらってきた父の遺骨と、前述の承德の石と、そして既に土に返っていた妹の墓の土とを、一緒にそこに納めた。それが家族でたった一人生き残った、私の務めであるような気がして……！

私と満州

栃木県 中込 敏 郎

出生から幼少期

私は、大正十五（一九二六）年十月三十一日に山梨の農家の長男として生まれた。生家は祖父の代に分家して独立していて、父は小学校卒業後すぐに就農した。しかし、五反歩ほどの自作地に若干の借地がある小農の悲しさと、その経営の主体が養蚕業で農作業も季節的に限られるという事情もあって、私が物心ついたころの父は、冬期間はいわゆる甲州商人として主に関東・東北の農村地帯を回る反物行商などをして、生計を維持していたようであった。商才に長けていたのか、かなりの収入を得ていたようだった。

満州事変の終息による、昭和初期の経済不況や、農村恐慌からの脱却の一手段でもあった満蒙開拓事業が、昭和七（一九三二）年から国策として開始され

た。たまたま遠縁に当たる清水繁氏が第二次武装移民団の一員として北滿の千振^{チブ}開拓団に加わり現地に入植して、その花嫁候補として父の妹である叔母に白羽の矢が立ち、昭和十年の春に我が家から滿州の清水家に嫁いで行った。

叔母から届く現地からの便りには、新天地での生活状況に加えて、折に触れて、広々とした大平原の様子と、肥料を全く必要としないという肥沃な農地と家畜の群れ、そして五族協和の旗印の下に理想の村造りへの夢などが書かれていて、それらが狭い内地の五反歩百姓に閉塞感を抱いていた父の冒険心をくすぐったことは想像に難くない。

二 滿州への移住

そして、父はついに一家を挙げての滿州開拓地への移住を決意し、親せきや知人らの反対を説得し、あるいは押し切って移住手続きを進めた。家屋敷と農地の全財産を四千元で売り払い、私の小学校卒業を目前に控えた昭和十四年三月に、父、母、姉、それに妹三人と私の七人家族は、甲府駅から「万歳、万歳」の声に

送られて故郷を後にした。

当時の千振開拓団は、昭和八年の入植者を正団員と称し、一人当たり二十町歩の農地が割り当てられ、集団生活から個人経営へと年を追って着々と基礎固めをしており、更に周辺の土地を買収しては、団の規模拡大策として盛んに補充入植者の受け入れを行っていた。我が家などもその一員で、縁故入植者と称して団本部より約十キロメートル離れた三江省依蘭県千振郷山梨村の頭道溝という地区に、十四町歩の土地の配分を受けた。当面は、当主だけの男世帯での共同生活で基礎造りが開始された。従って母を筆頭にした私たちの家族は、取りあえずの住居として叔母の隣家を借りての二重生活となった。

三 小・中学校生活

渡滿した年の四月、開拓者の子弟が通う現地の千振小学校の高等科一年に編入学した。当時の開拓団の構成からすると、正団員の子供は大きい人でもまだ三、四歳と幼かったので従って学童のほとんどは私たちのような縁故入植者か教員の子弟などで、その数も全校で

四十人ほどではなかったかと記憶している。校長以下教員は四人で、授業も復式または復復式で、家庭的な雰囲気の中で伸び伸びと勉強をしたものだった。

昭和十五年四月、父からの強い勧めもあって、日本人を受け入れる中等学校としては千振から一番近い佳木斯市近郊の長発屯という所に前年に開校した、省立の畜産学校の二期生として入学した。一番近いといっても汽車で一時間半ぐらいの距離があった。ここは、中堅的な畜産技能者養成を目的とした実業学校で、修業年限は四年、卒業者には国の制度による「副獣医師」の免許が与えられることになっていた。そんな関係から、生徒は開拓団の子弟を主とした日系人に加えて、国民優級学校を卒業し日本語の基礎教育を受けている中国人、さらには朝鮮族も交えた多様な人々で、この三民族が全寮制の下で一緒に生活をし、同じ教室で一般教養科目と畜産獣医学の教育を受けた。

四 父の突然の死

昭和十五年八月十九日、突然寄宿舎に迎えに来た父の仲間から、父の急死を告げられた。集団入植者十人

の最年長者（当時四十歳）としての気苦労と、男やめめ集団での不規則な生活がたたったのか、あれほど健康そのものだった父が、発病数日で不婦の客となってしまった。病名は「十二指腸潰瘍」との診断で、医療施設の不備と、医師の未熟も死を招く一因だったのではなかったかと思われた。

異国の地で、生活基盤もまだ固まらない状況下で、十六歳の姉を頭に五人の子供を抱え、大黒柱を失った母の失意はいかばかりであったか、あれからの長い人生の中でことあるごとにそのことに思いをいたしている。母は満州での生活をあきらめて、親せきを頼っての帰国を真剣に考えたらしいが、そんなところに救いの手を差し伸べてくれたのが、開拓団の幹部、宗光彦团长（組合長兼務）と太田宗次郎副組合長だった。みんなで力になるから何とか頑張ってこのままとどまるようにと、陰に陽に励まされ、そして援助をしてくれたと、後々まで母から口癖のように聞かされたものだった。その一つとして私のために、組合に「奨学金制度」が創設され、畜産学校卒業まで月額十三円の貸

与を受けることとなり、残る三年余りの学費と寮費をそれで賄うことができた。そして母は、組合長の特別許可を受けて母の実家の葉屋の下請けという形で薬品販売をやったり、満拓公社の独身寮の寮母を引き受けたりして働いた。姉は、組合のタイピストとして勤め、すぐ下の妹も高等小学校を終えるとすぐ佳木斯医科大学付属病院の見習い看護婦として就職するなど、女たちの手で一生懸命に家計を支えていた。後に思えば、先頭にたつて一家を支える立場である長男の私だけがのうのうとして、学校生活を楽しんでいたことになり慚愧に堪えない。

五 大学生生活

昭和十九年三月に畜産学校の卒業を迎えるにあたり、千振二代目吉崎組合長より開拓地畜産指導者養成の名目で、私に国立大学に進学するようにとの特別な配慮があり、当時満州国内での唯一の専門校であった、満州国立新京畜産獣医学大学畜産獣医学科の入学試験に挑戦することになった。学校長の推薦状に加えて開拓団長の推薦状も添えて願書を提出したが、募集人

員は日系人、八十人、中国系人、三十人という狭き門であった。書類選考を経て第二次の学科面接試験は、日本内地の数カ所と、国内では新京（長春）の大学本館で行われるとのことで、一月下旬の最厳寒期に、北満の開拓地から、一昼夜余りの列車を乗り継いで新京特別市まで行き一人で受験したことを、今でも鮮明に覚えている。後で聞いた話によると、受験者の総数は千人を優に越していたとのことだった。太平洋戦争も末期に近く、学徒動員も始まっていたこともあり、日本政府の方針で理科系の学生は卒業まで徴兵延期の恩典があつたことと、それに加えて戦時体制の比較的に緩やかだった満州国の大学に入ることと、戦時下の学生生活を少しでもエンジョイしようとのひそかな思いが、競争率の増大につながつたとの穿つた見方をした人もいたが、全く否定はできなかった。

たまたま大学の副学長格の橋爪教授が、千振の吉崎組合長の東大獣医学部先輩にあたることから、公的な立場に私情も加えた推薦状が届いていたらしく、口頭試問でも私には、専ら開拓地における畜産の現状や

ら、移植日本馬の飼育状況などについて尋ねられ、質問が片寄っていたように思われた。もっとも学科試験とは言っても、非常時体制下でもあり、英語、数学などのいわゆる学問的な出題はまったく無く、軍人勅諭の全文筆記と作文程度で、後は体力テストとして当時盛んだった銃剣道の基本動作や、反復土のう挙げ、そして校庭十周の持久走などで、今の時代では考えも及ばない風変わりな大学入学試験だった。結果は、推薦状が有利に働いたのか合格であった。

四月を待たずに三月のうちに入学式が行われて、晴れて大学生となり、開拓組合からの奨学金も八十円となった。学舎は、新京特別市の市街地からはるかに離れた歡喜嶺^{カキシノ}といわれていた所に、大学本館と、グラウンドを挟んで南北二棟の二階建ての学生寮と、そのほか別棟に食堂、集会施設などがあり、全寮制であった。養正寮と名付けられている寮は、一室六人の定員で先輩が三人、同級生が三人の部屋であった。

ここも、日・満系に加えて朝鮮族と蒙古族がそれぞれわずかではあったが在学していて、寮の左半分が日

系人学生、右半分がその他の民族に分かれていた。食事も配給制度の関係から、同じ食堂でも別々の食事に差別されていた。我々日本人学生には、白米の配給もあったようである。ちなみに長発屯の畜産学校時代には、中国系の生徒も全く同一扱いで同室に住み、同じ食事をとっていたため、大学での差別待遇には奇異の感を抱いたものだった。

六 運命の八月十五日前後

千振開拓組合のタイピストとして働いていた姉が、前年から肺結核を患っていたし、佳木斯医大病院に勤め始めたばかりの妹も、同じ病気に侵されてしまった。二人とも、職場を退職して自宅療養をしていたが、かわいそうに回復できずに、昭和二十年の七月十日に姉が、七月二十日には妹が相次いで亡くなってしまった。母の心身の苦勞はいかばかりであったかと、今になってそのことに思いが及ぶと胸がしめつけられる。母は、取りあえず火葬に付し骨壺に納めて、仏壇に置き朝夕の供養をして、私の夏休み帰省を待って葬儀を営む段取りをしていた。

大学は、八月八日から短期間ではあったが夏期休暇に入り、現地実習に行っていた三年生を除き、中国系学生は全員が帰省し、日系学生も市内や近くの実家、親せき知人宅へと半数余りが外泊許可を取って出て行った。私自身は、家の事情から少しでも早く帰省しなければならず、八日の早朝から新京駅に行つて長蛇の列の後ろに並んで、ハルビン——牡丹江^{ホクセン}經由の図佳線千振駅までの切符を求めた。ようやくのことで切符を手に入れることができ、翌朝の出発に備えて帰省準備をした。

八月九日未明、突然の空襲警報に飛び起きて屋外に出たところ、市内の方向の空は照明弾によりこうこうと照らし出されて、爆弾が次々と落とされている状況を目の当たりにした。何事が起きたのかとただ呆然として眺めるだけだったが、程なくしてソ連の参戦を知らされて、事態の容易ならざることを痛感した。

その後、軍事教練担当であった助教の森教官が関東軍司令部に向いて、学校としての今後とるべき行動について打ち合わせた結果、残留学生を統合引率し

て首都防衛に当たるべしとの命を受けて戻つて来た。

直ちにわか仕立ての学生部隊が編成されたが、確か三十人から四十人ぐらゐの人員だったと思う。かねてからの軍事教練の成果を發揮して、取りあえず形ばかりは整つたものの、武器といへば訓練用の旧式の三八式歩兵銃が若干あるだけで、到底戦力になるわけもなく、窮余の一策として、市内の知人宅などから銃器刀剣類を何でもよいから調達して来いと教官命令が出された。初代の千振開拓団長で、私の大学入学時の保証人でもあった宗光彦先生が、当時は満拓公社理事として市内の社宅に住んでおられたので、私はそこを訪ねて学校の状況を説明したところ、親類の陸軍の将校からの預かり物だという軍刀一振り、宗家に代々伝わる秘蔵の短刀一振りを快く渡して下さり、それを受けて勇躍歸寮したが、そのときの血氣盛りの学生部隊の意気込みたるや、当たるべからざるものがあつた。

八月十五日になって、正午から重大放送があるから全員食堂に集合せよとの命令があつた。食堂に集まつてラジオの前で緊張して並んだが、ラジオから流れる

声は雑音が激しく、ところどころしか聞き取れなかった。しかし前後の事情からして、戦争終結の玉音放送であることを悟った。幼少時代から神国日本と教えられ、天皇陛下の御真影に、ただただ頭を下げ、国のために死ぬことこそ男子の本懐と、ひたすら教育され続けてきて、一片の疑問すら抱かずにきた我が身にとってこの瞬間は、信じられない思いと虚脱感に襲われてしまい、一同呆然自失の呈であった。

七 混乱の新京市内で生き抜く

終戦の日から二、三日経過したころから無政府状態となり、治安悪化の情報が流れてきた。学生寮のあった場所は、市内から離れた野中の一軒家にも等しいところであったので、暴徒による襲撃を受ける恐れもあるとの判断から、そこを退去移動することとなった。森教官の手配で、武装したまま持てるだけの身の回り品を車に積んで寮を後にして、当時市内の至る所にあった関東軍の官舎、満鉄の社宅や独身寮などの空き家に行ったん落ち着き、更に数日後、改めて西陽区菊水町にあって無人状態となっていた、満鉄の二棟続き

の独身寮のうちの二棟、菊水寮を最適の場所として無断で占拠、入居した。結局、ここが引揚げまでの一年間の生活と活動の根拠地となってしまうた。

長期戦を覚悟して、当面は越冬のための食糧や燃料の確保に努力することになり、空き家になっている官舎や社宅を一軒一軒回っては、米や調味料、それに石炭などを片っ端から集めては菊水寮に運び込んだ。なかでも圧巻だったのは、当時既にソ連軍の接収管理下にあった、寮からすぐ近くの陸軍病院の倉庫からの学生決死隊による夜間白米奪取行動だった。森教官の巧みな陣頭指揮により、ソ連兵の歩哨警戒網の虚を突いて三十キログラム入りの缶を、リレー方式で搬出する作業は見事に成功し、五十俵を下らない成果があった。これが我々の一年間の食糧になると共に、後日続々と避難してきた北満からの開拓団避難民の救済に活用されて、大変に感謝されたものだった。

八 家族との邂逅

自分自身の保全と越冬に備えての集団生活の中にも、いつときも頭を離れなかったことは、北満の奥

地に残っているはずの、母と二人の妹の家族のことであった。この消息の情報収集にはあらゆる手を尽くしていたが、皆目情報が入らず不明のまま、苛立ちの日々であった。

終戦から一カ月余りたったころになると、市内各所に着の身着のまま満州各地から逃げてきて、やっとここ新京までたどり着いた哀れな姿の避難民が到着して来た。その中に、偶然にも我々の寮の隣の満鉄独身寮の「千早寮」に、千振開拓団の一行が収容された。

全く奇遇としか言いようのないことだった。聞けば八月十二日に、命令により千振駅に緊急集合して最後の列車であった無蓋貨車に乗せられ、佳木斯を經由して綏化^{スヰホア}駅に着いたが、そこで降ろされ元日本軍の飛行場の格納庫に収容され、一カ月余りの収容所生活を送った後、南下する列車によりやく乗れて新京に到着したとのことで、みんなはかなり衰弱している様子であった。

たまたま私は、学徒集団から派遣されて西陽区日本人会（のちの日僑俘連絡処）の仕事で、泊まりがけて

出掛けていて不在だったが、森教官が逸早くこのことを知り「中込の家族はいないか！」と言って捜し出して、すぐに私の部屋に迎え入れていたのだった。連絡を受けて私もすぐに帰り、感激の対面を果たしたが、お互いの無事を確認し合うことができて、本当に何も言えない嬉しさと、安堵の気持ちでいっぱいであった。その時、八歳の妹とし恵は、不順な天候続きと避難行の長旅の疲れで、大分衰弱していて、すぐに特設の診療所で医師の診察を受けたが、ジフテリアの疑いと診断されて、その手当をしてもらったが、幾日もたたない九月二十六日に、かわいそうにも不帰の客となってしまった。教官の特別な計らいもあって、同級生の佐々木君が実家が石川県のお寺であったので、にわか仕立ての僧侶となってもらい、見様見真似での用いをお願いした。あの混乱状態の中にしては、異例とも言える葬儀の形が整い、多くの同窓生の参列を得て野辺の送りができたことは、せめてもの供養で、今でもこのことは忘れられないことである。遺体は火葬に付することができずに、友人たちの

手によって、寮の裏側の空き地に穴を掘って埋められた。その当時には、もう毎日毎日、何人何十人という老人、子供たちが亡くなっていて、みんなそのままの姿で穴に埋められる有様であった。

九 避難生活と援護活動

終戦後の混乱により一時的に無政府状態となっていた新京市内も、そのうちに在留邦人の有志により、自称「日本人会」なる組織が旧行政区単位ごとにつくられて、在留邦人相互の連絡やら、ますます増えてくる北満地区からの避難民の受け入れと救済活動などに当たっていたが、やがてソ連側の肝入りで中国人による治安維持機関が設けられて、一定の秩序の下で施政らしきものが行われるようになってきた。そして自称日本人会も公に認められて、維持機関の監督下に置かれることになり、名称も「日僑俘連絡処」と改めさせられた。

当時、新京市にあった満鉄、満拓それに市の行政官などいわゆる有力者は、ソ連の参戦と同時に南に向かつて退避し、それに続いて一般の民間邦人も新

京を捨てていたが、終戦の報によりその大半の人は再び市内に戻り、日常の生活をしていたというのが実態のようである。

そして一カ月を過ぎたころから、満州の奥地で生活をしてきた開拓団などの人々は、七月の根こそぎ動員により壮年男子はすべて出征してしまったので、残った老人、婦女子が陸続として新京駅に降り立ち、日本人会の手配によって人の住めるような建物という建物に、半ば強制的に押し込められていた。一例を挙げれば、独身寮の一室六畳間の部屋には三家族十人ぐらいが入れられるのが普通だった。当然のことながら、だれもが着たきり雀で乳児を背負い、幼児を抱きながらの雑居生活であった。わずかばかり配給される高粱コウリヤンの粒、玉蜀黍トウモロコシの粉などで飢えをしのぎ、最悪の衛生環境のもので、特に抵抗力の弱い乳幼児の衰弱は甚だしく、冬の訪れと共に発疹チフスの大流行となり、毎日毎日死者の山が築かれていった。秋のうちはまだ穴を掘って埋めることができたが、真冬になり地面が凍結してくると共に死者が急増し、もう墓穴を掘ることも

できずに、あとはそのまま放置するしか方法がなかった。私自身も発疹チフスは免れたものの、再起熱という熱病に侵されて何日か高熱が続いたことがあったが、家族による手厚い看護によってと言っても精神的なものだけで、薬などは何も無いのが実情であるが、命拾いした。

さて、森教官を指導者として集団生活を送っていた我々は、自主組織としてそれぞれ担任の仕事を決め、秩序ある一年を送っていたが、十八歳から二十歳の血気盛んな若者集団は、地域の中にあつて特異な存在で、その活動には周囲の人々に関心を持たれ、かつ期待もされる立場にあつた。主として避難民の救済などの奉仕活動に取り組み、治安維持にも協力するなど、頼りになる集団として高く評価されていた。私は、引き揚げるまでの数カ月間、友人数人と日僑俘連絡処に意向を命ぜられて活動していたが、主として戸籍係を担当していて、毎日毎日持ち込まれる死亡届の処理に追われた。以前の区役所の建物のなかで、日本の法律に基づいた書類作成などで、即席の勉強をしながらの

仕事だったが、実際に受け付けた数の中でどれだけが日本に届き正式に処理されたのかは、今もって疑問の一つになっている。

十 国・共内戦に巻き込まれる

ソ連軍の進駐から八路軍への引き継ぎ、そして国府軍の反攻による共産勢力の追い出しと、半年余りの間に目まぐるしい変転があり、その都度敗者である我々は、心にも無い対応を余儀なくされていた。戦争映画さながらの八路軍と国府軍の市街戦の状況を、寮の三階の窓から眺めるといふ生涯に二度と無いであろう得難い体験をしたことも、今になれば一つの語り草である。しかし、その最中のある夜、慈父のごとき大きな存在であつた森教官が、流れ弾（一説には狙撃されたとも言われていたが）によって大腿部を撃たれて、出血多量で亡くなられたことは、誠に遺憾の極みであつた。たまたま個室に住んでおられたことが災いして発見が遅れたことが命取りとなつたが、思えば自身の家族は市内に残したままで、単身で我々の集団にとどまられて、親身になって面倒を見られていた。その崇高

なお気持ちには、何と云ってお礼を申してよいのか分らない。ただただご冥福をお祈りするのみであった。

十一 引揚げ

国府軍の勝利により一応、治安の回復が図られたが、それと同時に待ちに待っていた日本への帰国のうわさが、うわさから次第に現実のものになりつつあった。昭和二十一年の七月初旬ごろから、順次実行に移されてきた。当然のことながら、困窮度の高い開拓団などからの避難民が、優先帰国することになった。私は、開拓団出身の家族と一緒にということから、学生の集団よりひと足早く帰国が許されて、最初の枠の中に組み込まれた。南新京駅から無蓋貨車に乗せられて一路南下し、錦県で下車させられて引揚船への乗船の順番を待つ間、収容所に入れられて待機していた。そして念願の帰国が現実のものとなり、コロ島より引揚船に乗船した。引揚船の船名は忘れたが、日本籍のあまり大きくない船だった。数日の航海の後に博多港に入港し、厳重な検査や防疫を受けたが、DDT

を頭からたっぷりとふりかけられての荒っぽい防疫消毒には驚いたものだった。引揚船によつては、給食設備や船内の衛生状態が最悪で、チフス、コレラなどの疑似患者が多発した船もあつて、それらの船に乗り合わせた人たちは、一カ月も上陸が許されずに湾内での船上生活を余儀なくされたが、私たちの船は何事もなく、七月二十九日上陸を許されて、祖国日本の土を踏みしめた。

一人千円の日本円との交換が認められて、我が家族も三千円を受け取り、援護局手配による満員の列車に乗り込んだ。関門トンネルを通過して山陽本線、東海道本線を走り、名古屋駅から中央本線に乗り継ぎ甲府駅に降り立ったのは、七月三十一日であった。昭和十四年三月に一家七人を挙げて、希望に燃える満州に向かつてから七年四カ月ぶりに、母子三人となって故郷の土を踏みしめたのだったが、それは無残で、哀れなものであった。

中巨摩郡西野村にある母の実家、功刀家に三人が転がり込んだ。ここで親身の世話を受けることとなっ

た。

十二 千振開拓団のたどった道

八月九日、ソ連の不法な参戦と同時に佳木斯方面在住の邦人は、県公署の指示で千振開拓地に一時的な緊急避難の形で集められたが、その受け入れてでんやわんやだった八月十二日に、今度は開拓団関係者全員にも退避命令が下った。この連絡については、各種情報 of 交錯と混乱の中で、しかも残留者がほとんど婦女子ばかりという特殊事情から、連絡が徹底するなどは到底不可能なことであり、したがってこれを受けた各部落でもそれぞれの対応はまちまちであったが、このことについてはだれも責めるわけにはいかない。

命令に素直に応じて直ちに指定された千振駅前に集結した者。いったん集結はしたもののいつ発車するとも知れぬ列車の手に疑心暗鬼となつて、リーダーに言われるままに、また元の部落へと引き返す者。更に頑固な老人がいて、命令を無視して現地残留の道を選んだ集落も幾つかあったようだ。そして情報の伝達そのものが遅れて、やっと駅に着いたときには既に最後

の列車が発車した後だった者もいたように、運命が見えない糸によつて幾様にも分かれて引つ張られていたようであった。それらの運命の分かれによつてどんな引揚げとなつたか大別してみる。

第一のグループ

私の家族などはこのグループに属し、県公署の手配した無蓋貨車に乗せられて千振駅を発ち、苦勞しながら新京までたどり着いたグループ

第二のグループ

汽車に乗り遅れて、その後の治安の乱れから現地にとどまることも不可能となり、集団を組んで徒歩で南下し、途中で暴徒などに襲われるなどして多数の犠牲者を生じながら、依蘭を経て方正付近で越冬生活を送つたり、一部の集団はさらに南下して、ハルビン市の收容所までたどり着いたりして、それぞれ幾多の苦難の末に、昭和二十一年以降に帰国を迎えたグループ

第三のグループ

最後まで現地残留を決めたものの、相次ぐ暴徒・匪族の襲撃に遭遇したり、ソ連兵の暴行を受けたりし

て、最後には集団白決の道にまで追い込まれて、それを選んだグループ

以上のようなグループ分けができるであろう。

かくして、全満州で一、二を競う優良模範開拓団であるとして、自他共に誇っていた千振開拓団の家族など関係者五百戸二千人のうち、確たることは分からないが約半数の尊い犠牲者を出し、残りの半数が苦勞に苦勞を重ねて、故国日本にやっとたどり着き、新しい苦勞に立ち向かったのである。

昭和四十年代になって、全国各地に散在している千振開拓団出身の同志が連絡を取り合い、親睦団体として「全国千振会」を結成し、毎年集まっては物故者の冥福を祈り、現存者の健康を喜び合っている。

十三 再び内地開拓を志す

引き揚げてから二十日余りたった昭和二十一年八月下旬のある日、「元の千振開拓団員のうち現地召集の後、内地や朝鮮で終戦を迎えそのまま復員した人たちが、元千振家畜診療所の玉崎所長を中心に、やがて引き揚げて来るであろう仲間たちの受け入れ準備をして

いる」という情報を耳にしたので、母と共に栃木県那須村の現地に出掛けて、早速仲間に入れてほしいと申し出たところ、同郷山梨出身の先輩が何人かいて、その人たちの口ききもあって快く許され、その数日後には早速に単身で現地に入り、「千振先遣隊」と称していたその十人ほどの集団の最年少者として、当時の那須村の住民となった。時に十九歳と十カ月であった。

当時は旧陸軍軍馬補充部の厩舎だった建物を借りて仮の住居とし、農林省の開拓基地農場になっていた同補充部跡の耕地を借り受けての自給自足と、引き揚げて来る同志の受け入れ準備が先遣隊の主な仕事であった。

昭和二十一年十一月七日、元千振開拓団の吉崎団長の選考を経た総員七十六人（その中には当然、先遣隊員十人を含み、また夫がシベリア抑留から帰って来るのを待っている婦人十人ほども交じっていた）による入植式が行われ、内地における新しい開拓の組織としての集団活動が開始された。これが現在の千振開拓農協の前身である。一年間は完全な共同生活で、農耕班

(農場用地を借りての耕作で、玉蜀黍^{トウモロコシ}、大豆、そばなどを栽培し、自給食糧の確保に任ずる班)、作業班(木材の伐採などを請け負って現金収入を図る班)、そして炊事班(婦人団員が担当する)などで、それぞれが明日への希望を胸に、その日の糧を得るために一体となって一生懸命に働いた。

同じ体験を経てきて、そしてみんなが無一物という同じ境遇にある者同志の団結は固く、満州以来の千振一家の精神がここでも遺憾なく発揮され、周辺の部落の人たちからも注目される集団となりつつあった。一方では、それぞれの人が故郷などに残っていた家族も、その後続々と集まって来るようになり、小学生や幼児も増えて、にぎやかでバラエティーに富んだ共同集団に変わっていた。

昭和二十二年十二月、吉崎団長を中心とする団幹部の骨折りにより、国有地の払い下げに加えて民有地の解放もあり、入植地の土地確保がなされたことから、いよいよ土地の個人配分、そして開墾建設に着手することとなり、より効率化を図るために全体共同体を解

体して、少数規模の共同体に移行することになった。

おおむね五、六戸程度の単位集団に再編されたが、満州でもそうであったが、ここでも自然と出身県ごとの仲間が集まる結果となり、私は山梨二組に属することになった。わずかばかりの農産物の配分を受けて、生活は個人、作業は小集団共同という形態での本格的な新しい村造りが開始された。それぞれの配分地に「天地根元造り」の笹小屋を建てて住居とし、一貫目もある重量の開墾鋤を振るっての開墾作業は、配給のわずかばかりの食糧に頼った空腹のもとで続けられた。その上に現金収入の道として、数キロメートル離れた国有林から払い下げを受けての炭焼き作業もあって、昼夜を分たぬ懸命の労働が続けられた。今でこそブルドーザーや、トラクターなどの農耕機械はどこにでもあり、いつでも自由に使える時代となっているが、終戦直後の昭和二十年代ではすべてが人力に頼るしかなかった。樅^{ノスギ}や檜^{ノウ}の自然林の伐採跡地には、那須地帯特有の篠笹がびっしりと密生していて、それを刈り払い、焼き払いしながらの開墾作業も一坪当たりに一、

二株はあった大きな櫟の根っこにあたると、それを掘り起こすだけで優に一時間もの手間と相当な腕力を要した。若い私などでも一日にどんなに頑張っても二十坪が精々で、隣同士お互いにその進度を競い合ったものだった。開いた畑に配給されたわずかな硫酸などの肥料を施し、ジャガイモを植え陸稲をまき、秋には小麦などもまいてみたが、期待どおりの収穫はなかなか得られなかった。

昭和二十八年、二十九年と続いた大冷害は畑作に決定的な打撃を与え、収穫皆無の状態となったために、これを契機に組合でも個人においても、一気に酪農熱が高まり経営転換が進んでいった。我が家でも昭和二十六年に仔牛を一頭購入、その牛が二十八年に分娩して搾乳を始めたのがきっかけで、徐々に自家産牛で増頭の方へ進んでいった。今では全国的にも有名な那須山麓の一大酪農団地へと発展した。

十四 結婚

昭和二十五年六月に結婚した。仲人を引き受けてくれた伯父と、花嫁、それに付き添いの義妹の三人が開

拓地の粗末な住居に来て、当方は、母と妹それに叔父夫婦、唯一の来賓として組合長の浅川さんを迎えた。結婚式と披露宴のまねごとを済ませて、花嫁はもう翌日から慣れない農作業を担う一員となった。

十五 千振開拓組合長に推される

満州開拓以来、組合幹部としてあらゆる面で尽力し、そして指導的立場に立って活躍してきた先代たちが、高齢を理由に世代交代を言いだし組合内部の空気もまた、徐々にその方向に傾きつつあった。昭和四十八年の役員改選期にとうとう私に白羽の矢が立ち、常勤専務への就任の要請があったが、準備不足、家庭の事情などを理由に固辞し通したが、五十年の改選期には、とうとう有無を言わずに組合長に推され、致し方なく引き受けた。

以来、農協経営の全責任を担う立場が続き、三百六十五日、そのことが頭から離れることのない生活に入った。本来の組合業務のほか、行政事務の取りまとめ、日常生活環境のこと、更には個人的な家庭争議の仲裁に至るまで、集落内の出来事的一切に関与するの

が開拓組合長の仕事との認識が、自他共に共通していた時代で、いろいろなことに遭遇した。その後、逐次いろいろな役職に就いたが、すべて千振開拓農協の発展のために微力を尽くすことを天命としていた。

十六 現地訪問団に参加

昭和五十五年ごろから、千振開拓団員だった有志により、旧入植地探訪の機運が醸成され、訪中計画が進められるようになった。中国当局も徐々に外国人の入国を認めるようになってきたものの、それはまだ限られた都市部周辺に限られ、北部の僻地は未解放地区ということで、外国人は厳しい規制下にあった。その厚い壁を破るための交渉が粘り強く続けられた結果、五十六年の春によく実現の運びとなり、私も訪問団の一員として参加することができた。一行三十数人のうち、約半数が元千振開拓団の正団員で、その他はその婦人や私のような二世で、勇躍出発した。

三十五年ぶりに見た旧千振開拓地は、行政上は「黒竜江省樺南県」に属し、共産党県委員会主導の下に県長以下の行政官が人口三十万人にも膨れあがっている

県の行政を担当していた。先方が指定した学校や、新しいダム、そして模範的な人民公社の共同農場などの視察を次々とこなした後、訪問団のたつての希望で、開拓団当時の霊地「東宮山」にも行ったが、当然のことながら我々の信仰の基だった千振神社は、跡形もなく撤去されていた。また、当時威容を誇っていた忠霊塔も無残に破壊されて、残骸と化しているのを目にしたときには、予期していたことはいいながら、感慨無量の思いであった。元千振地区を見ての第一印象は、庶民の住居や、泥んこ道などは往時とほとんど変わりがなく、三十五年前にタイムスリップしたかの感を抱いたが、一方ではトラクターなどの大型農業機械の稼働や、女、子供の服装などには近代化の息吹きを感じた。住民感情は予想以上に友好的で、訪問の先々で各家から大勢の老若男女が飛び出してきては、バスを降りる我々一行を取り囲み歓迎の意を示された。特に旧部落では、かつて使用していた共同井戸を発見、そして旧知の中国人の老人に声を掛けられて、お互いに名乗り合って感激の握手を交わすなどの

光景も見られて、訪中旅行の目的を十分に果たすことができた。私も、旅行社を通じて捜してもらった、大学時代の同窓生四人とヘルピン市で会い、熱烈な歓迎を受け、夕食に招かれてお互い片言で歓談交流を果たしたし、畜産学校の所在地だった長発屯の集落でも、二人の同窓生と感激の交流を果たすことができて満足な旅となった。

あの悲劇から五十有余年、七年余りの多感な青少年時代を過ごした満州での生活や出来事は、私の人生における重要な部分を占めていることは、疑う余地のないところである。したがって彼の国の政治の動向や経済の動き、国民生活などには殊のほか関心を持ってきたし、これからもそれはずっと続くことであろう。

我が故郷、満州を思う

群馬県 石川 初吉

一 渡満から終戦まで

私は、昭和二（一九二七）年六月三日生まれである。父は東京浅草で天幕シートの加工販売をしていた。昭和二年、金融大恐慌のあおりを受けて不景気になったときに、知人の連帯保証人になり、知人の借金の肩代わりをしたために商売ができなくなったのか、新天地満州で一攫千金を狙ったのかは定かでないが、家業を母の弟養和田元吉に譲って、単身関東州の大連に渡ってしまった。後年になっても父はそのことについて何の説明もしなかった。

父は大連で食べてゆくためにいろいろな仕事をして、自分に向いたものを探すのに苦労したようである。昭和六年九月に満州事変が起きてから、父の運が開けてきた。満州出兵のため大連に進駐した、仙台の